

不死鳥の飛翔を願って

伴 義 孝

〔1〕 転換期に思う

私が監督になったのは昭和48年度よりであるが、その後の部活動を概括するには、堀江前監督の範囲と重複するかもしれないが、少々さかのぼる必要がある。それはこの時代と期を異にして新しい指導方針を立てなければならなかった背景を私なりに受けとめたことについてご理解とご批判を仰ぎたいからである。

敬 意

私は、昭和43年関西大学に体育教員として就職すると同時に関西大学レスリング部のコーチの一員となることをおおせつかった。当時は、昭和39年の春季リーグ戦（故村山栄治主将の時）以来、西日本学生レスリング・リーグ戦において8連勝を続けて記録を更に延ばそうと鋭気の漲ぎっていた時である。しかし、リーグ戦に限って云えば連勝を続けてゆくにはかなりの苦戦が予想されていた。日本協会の協会誌に当時の西日本学生レスリング連盟会長・松井清氏がそのことを次のように講評している。

……戦前の予想では、個人個人を見た場合は昨年度とほとんど同メンバーの近大かと思われましたが、チームとしてみた場合は、まず第1に関学の優勝で、あるいは組合せの都合では同大と思っていたが、一番実力に劣る関大が優勝したことは、自力以上の力を発揮し、やはり伝統の賜物としか思われぬ……。

それにもかかわらず、監督と選手の奮闘ならびにOB諸氏の支援で9連勝をものにした。秋には余勢を駆って10連勝を飾ったのである。

昭和44年は数名のポイントゲッターを卒業させ更に戦力低下を来たしたのである。が、この年も監督と選手の奮闘ならびにOBの諸氏の支援で春秋を勝ちぬき12連勝を達成した。同じく松井清氏によれば、春は次のような戦力状態であった。

……本年一人の卒業者もなく、昨年と同メンバーの近畿大学、ほとんど無傷の関西学院大学の両優勝候補に、引きかえて多数のポイントゲッターの卒業にて、戦力低下の、おそらく、だれが見ても、優勝の要素のない、5、6位が順当の関西大学が11連勝を遂げたことは伝統と、気力と、チームワークで勝ち抜いたとしか考えられぬ……

こうして秋も勝って12連勝となった。この12連勝は、関西大学レスリング部のリーグ戦連勝記録の3大記録（昭和29年秋から昭和31年秋迄の5連勝、昭和35年春から昭和37年春迄の5連勝、それにこの12連勝）のひとつであり、通算27回目の一部リーグ優勝の記録である。

さて、こうした記録は部員の自覚なしにして成りえない。またOBの情熱と支援がさらに彼等を奮奮させたことは云うまでもない。

現在の監督の立場から、絶大の敬意を、その両年の当事者ならびにこれらの全ての記録に携わった諸氏に表したい。

大 学 紛 争

昭和43年頃より東京方面の大学に端を発し、全国的に大学紛争が激化し、大学スポーツもその渦中に巻き込まれるようになった。このことはかならず関西地方にも近々波及するであろうと易しく予想できた。

関東学生レスリング連盟では、その春のリーグ戦は圧倒的優勢で日本大学が優勝している。秋の王座決定戦に向って努力を続けていた時、大学紛争に巻き込まれてしまった。このことは当時、大学関係のレスリング指導者の間で色々興味深く我身と照らしあわせて話題とされたものである。当時の日本大学レスリング部部員は「学園紛争とレスリング部」と題して次の一文を寄せている。

……43年6月4日われわれの努力が、功をそうし、……中略……われわれの完全優勝に終わった。……中略……心は、そのまま王座優勝にかたむいた。……中略……しかし6月16日、突然、経済学部ToStrayキが起った。数日後、学園は、次々と彼らによって封鎖されていった。もちろん本部も占領された。「本部の地下!」われわれはがく然とした。そこには、われわれの汗が深くしみ込んだマットがあった。練習は、やむなく中止された。われわれに不安の日々が続く。……中略……仮の道場を借りた。しかし、そこで練習はごく短かいものだった。マットを借り受ける資金が続かなかったのだ。再び道場を捜すはめになった。……中略……落ちつかない日々が続いた。……中略……練習に身が入らない。「やはり、ここではダメなのか?」幹部の胸には、いちまつの不安が生じた。……

この一文を読んで、近々こうなるとすでに関係者は想像できたのである。この大学紛争は1年遅れて関西大学にも波及した。昭和44年6月20日、「ヘルメットにゲバ棒、覆面で武装した全共闘に属する諸君が他の大学の学生と共に、突然、大学本部のある関大会館に乱入、これを占領」し、会館の破壊をはじめたのである。この時のゲバ学生の要求のひとつに「体育推薦入学」の廃止があり、同時に「関大右翼体質を打破する」のスローガンのもとに、体育会がそれに加担しているという噂や全共闘の女学生を体育会が誘拐したという噂等をさかんに一般学生に吹聴したのである。

部活動の低迷化の外因

この頃の激しかった紛争はそのまま尾を引いて数次にわたったのである。その間大学の機動隊動入によるロックアウトが数回にわたってあり、体育会所属の運動部も練習スケジュールを大幅に狂わすことになった。また、日曜日、祭日の学内立入禁止、午後8時から午前8時迄の学内立入禁止事項等の措置がなされ、教育後援会が学生のために寄贈した合宿所の使用も禁止措置がやむなくとられた。これらは部活動に多大の支障をきたすことになった。

こうした状況が50年1月17日に至ってもまだ続いていたのである。すなわち学生の一部が学費値上げ白紙撤回を要求し、各学舎を封鎖し、教室その他重要施設を破壊した。これは学費値上げ反対闘争のため入試実施の妨害をもくろむものであった。

この長い紛争は、過激派学生の学内ゲバ殺人事件、学内での爆発物投下事件等も含み、学生に心の荒廃と、無気力と、それに相互の不信をもたらした。かなり以前より学生の間では「人間性の疎外の克服」がテーマとして取りあげられていたことを思いあわすと何とも皮肉である。このことは必然的に体育会の各部に影響をもたらした。部員の中にも目標を見失くなって退部するものが続出した。またその間幾度も迎えた新入生もそうした状況下において入部希望者も減少の一途を辿った。

ちなみに昭和44年に、それ以降の体育推薦入学制度が廃止されるに至ったが、この制度による入学

者もすでに漸減方針を実施しており、この年のこの制度による入学者は全部で66名の枠内ということになった。しかし、実際の入学者は入学試験の結果66名を下回っている。こういう状態であったから新入生の中に自発的な新入部員を見つけることに依存しなければならない。その時の無気力さの蔓延である。新入生の入部もほとんど期待できなかった。

最悪の条件下での努力

先に述べた日本大学も紛争の煽りで43年以降長らく低迷を続けて、やっと昨今往年の日本大学の威厳をとりもどしつつある。しかし、往時の域には遠くいまだ及ばない。

我レスリング部にあっては、昭和44年、阿部裕、太田正志、平野泰啓、和田恵夫の4名が入部し、しかもその年は12連勝達成の時でもあったので、彼等是我部の伝統的練習方法を身につけた。が、彼等4名の前に4回生になる迄立ちふさがったのがこの紛争である。彼等のみならず昭和44年以降の4回生はリーダーとしてこの紛争の被害を蒙り頭を痛めたのは勿論である。

昭和47年、主将の和田恵夫は関西大学体育会誌に次のように書いている。

……わが部は、昭和23年に創設されて以来多くの輝かしい戦歴を残してきました。ローマ・オリンピック7位、東京オリンピック優勝の市口政光先輩を初め、全米選手権および世界選手権に多くの先輩を輩出し、西日本リーグでは、通算27回の優勝（内12シーズン連続優勝）を成し遂げ今日に至っています。

ところが、ここ2、3年体育会全般に言えることですが、部員の減少に悩まされて、思うように練習ができない状態です。多くの先輩により築きあげられたこの伝統あるレスリング部を立て直し、大きな前進を図る為にはまず、

1. 部員を一人でも多く集める。
2. 部の体質改善を図る。
3. 全員のモラルの向上を図る。

など多くの問題をかかえております。これらの問題はどれを取りあげても今日のレスリング部より切り離せない重要な問題です。今、このピンチに立たされたレスリング部では、部長、監督を始め、主将以下部員一同君達のご参加を仰ぐものであります。

まさに部員獲得に苦勞する時が始まろうとしていた。

さて、長々と堀江前監督の受け持ち範囲に及んだが、それは斯様な時に監督を務められたことに対する敬意の一端である。

また昭和44年の秋季リーグ戦において、紛争の最も激しい年にあつて優勝したことは、監督とコーチ陣、それに指導協力のあつた諸先輩ならびに当時の現役諸君の並々ならぬ努力の賜であることを特筆しないわけにはいかない。特にその当事者であつた現役諸君に賛辞を送りたい。

かつ、歯をくいしばつて、昭和45年、46年、47年度を頑張つてくれた現役諸君にそれ以上の賛辞を送りたい。同時に、母校に就職して以来身近かにいながら部員減少にひとつの歯止めをすることのできなかつたコーチとしての私の非力を深くお詫びしたい。

新しい出発

私が特に昭和47年にこだわるのには次の理由がある。当時の4回生は前出の主将和田、副将太田と阿部、それに主務の平野の4名である。3回生には唯一人二部に籍をおいていた屋麻戸が仕事と勉強のあいまにレスリングをやりたいということで2回生の時より練習参加した以外は、昭和45年以来1

人も入部していない。2回生は3名いたが1名が部を去り、他の2名もその後退部した。1回生は飯田、岡田、片野、計3名が入部し、久々に新人が入部したというような次第であった。しかも、大学紛争下であって、練習の系統性を欠くような時で部員も時として心の落着きを失いがちであった。

こうした練習にも人数的に事欠く状態であったが、堀江監督のもとに昭和47年度の次の方針を決定した。

1. 昭和47年のメンバーの不足分は柔道部よりかりうける。
2. 4回生の練習計画は従来通りとする。
3. 1回生は彼等のペースにまかせて練習意欲の向上を待つ。

この決定を当時の4回生は理解してくれた。勿論部員の勧誘には務めたが効きめがなかった。

問題は、春に二部落ちはしたが、その後この3名の1回生を従来通りの方針で練習させていたら、もしかすると秋には一部復帰も可能ではなかったかという疑問である。だが、指導陣の決定はそうではなかった。昭和44年度以降既に転換期を目のあたりにして焦燥に駆られていた指導陣は、昭和47年度の1回生より新たな分節をつけて関西大学の事情下のもとで新しい道を選ばねばならないと、決定していたのである。

この当時、紛争の影響があって学年間に、物の考え方において、かつてない程の大きな断層が見られた。それを、4回生も理解して、いわば彼等の卒業後、その1回生が後を引きついでくれる事に託したのである。4回生の決して近視眼的ではなかった勇氣ある選択を誉めなければならない。

この決定に対しては、当の指導陣がもった唯一のもどかしさは、その4回生諸君に二部落ちの悲哀をなめさせたことであった。が、次の年よりの新方針のもとでの不死鳥の飛翔に望みを馳せたのである。

〔2〕 新 生

堀江前監督が、仕事のご都合で、昭和47年をもって退任された。その後任に私が推されて昭和48年より監督に就任した。

当時、私は33才で、33をもじって $3+3=6$ 、つまり「カブ」でいう6は勝負どころ。いささか不真面目ではあるが、私の職業（母校の体育教員）の方もここらが勝負時とそろそろ観念をきめていた時だけに、この大役を役者不足と知りつつお引きうけすることとなった。

紛争を契機に、新しい大学スポーツのあり方をいろいろ模索し始めた時であるので、レスリングについても関大における学生スポーツとしての新境地の開拓が必要であるならば、その方向に進むことを前提にとりくむことになったのである。しかし、決心するまでには、堀江前監督、光富元コーチ、故村山コーチに新方向を模索することを十分に相談した。「私なりのやり方で目鼻がつくまでやる」ことを了解してもらい、それに勇気づけられて新出発となったのである。

昭和48年

春、和田、太田、阿部、平野の4名を送りだした。卒業式を終えた夕刻、4名と共に会食をして、前途を祝福すると共に4年間の労を犒った。彼等は「最悪の条件下」（4年間紛争にふりまわされた）、でのレスリング生活を通じて多くのことを学んだことであろう。紛争、部員激減、二部転落……。

当時の和田主将は、「……部員減少のために、二部に転落してしまった。私が主将になった時に、二部に落ちてしまい、伴先生始め、諸先輩方に対して申し訳なくて、泣けて泣けて、涙が止まらなかった」と、その悔しさを印している。この悔しさを胸に秘めて彼等は関大を卒業して行ったのである。会食の席、そこはスポーツマン、苦勞の連続を社会で生かす、と胸を張ってくれた。

スポーツでの経験がこのように青年の心を捉えることも大切なことである。彼等に耐える心が培われているならば、いかなる結果に終わっても、それはやがて結実する。それを彼等におしえられて、48年度のプラン造りにかかった。

残るのは数名の部員である。3月初めに、この3名がそろって、ある学生団体の欧州セミナー旅行に参加することになってでかけていった。後で解ったことであるが、それを機にそろって退部を計画していたということであった。2回生になり、伝統ある部を少人数で守る重圧に抗しきれなかったのだと云う。責任感の強さが逆の形で表われてきたのである。

そうとは知らない私は、彼等3人の欧州旅行に際して、外国旅行で何を学ぶか、どこどこの博物館ではレスリングの彫刻を見なさい、などとアドバイスをしたものであった。同時に彼等が、この旅行後レスリング離れするのではないかという感も働いていた。そこで、逆手にとって、旅行を有意義なものにしなさい、と彼等の胸中に飛び込んだのである。

とにかく、新出発と云っても、手がかりを失うことだけはできなかった。彼等の旅行スケジュールに合わせて、春の練習計画を練ることにした。彼等の帰国を待って、旅行の成果を聞きだしながら気軽に、春の練習を開始した。少人数（この3名と住本の計4名）の練習では効果もあがらないので桃山学院大学の春季合宿練習に通いで参加させてもらうことにした。

さて、この練習の初日、我が関大の「虎の子レスラー」は1人をおいて姿を見せなかったのである。新出発ということで、冷静かつ気長に構えていた私も、さすがにビックリしてしまった。その1人に聞くと全員退部したいのだと云う。そこで、練習をきりあげ、その夜とりあえず「話しあう」約束を電話連絡でとり、午後11時過ぎまでかかってやっと彼等を説得した。その時、強調したことは、「君達が新しいやり方で、新しい関大レスリング部を造るのだ！」と云うことであった。私の主義として「学生を甘やかすような形」で無関矢鱈に誉めちぎったり、あるいは手を取って喜こんだりすることはしなかったのであるが、この時は1人1人の手を強く握って、主将住本、副将片野の陣容で、「一緒に頑張ろう」と願った。時代の変ったことをこの時程痛感したことはない。既に昨年、堀江前監督や関係者のもとに「新方向」の進むべきは決定していたが、真実これは「ゼロからの出発」が必要であると思った。

春のリーグ戦は、「……二部では、名門、関学をトップに広島修道大、名城大に、新人の加入で補強された名商大で優勝が争われるだろう。名門、関大は4名のレギュラーを送り、選手層の薄さより今シーズンは大きな期待は持てない」と見られていた。これに対して、関大は「全員一団となって再建のため頑張る。今リーグ戦はベストをつくすと同時に今後の足がかりのための船出と思う。一念発起。」と私の胸中を秘めて臨んだのである。結果は4位。出場するメンバーの不足分の構成は、柔道部と拳法部より調達したのであった。

「ゼロからの出発」である。過去のプライドが選手を縛るようでは困る。選手に二部で初歩からレスリングを学ぶことを要求する。こうして、春の練習の苦い経験を参考にしながら、夏へ向けて合宿

迄の練習を行なった。

夏の合宿は、チームワークと基礎体力を養成することに主眼をおいた。

今、一番印象に残っているものは、やはりこの夏の合宿であろう。

合宿場所は神戸にある監督の家、練習場所はその付近の山々、そして兵庫県でレスリング№1の高校の体育館、練習相手はその高校生、しごく人は、我々の監督、その高校のコーチ、そして関大のOB、練習のスケジュールは朝のランニングと午後のスパリングである。今、自分の書いている指が震えている。どうにも止まらない。この夏の練習を思い出すだけでこういう現象が起こるのである。とにかくあの高校のコーチの顔を思い出すだけで身の毛がよだつ。部員全員がそういう状態に陥ることは火を見るより明らかだ。

しかし、どうしてこんな場所で、合宿をしなければならなかったか。この原因の一つには4回生がいないということで、今一つクラブのまとまりを欠いていること。そして第2に、合宿場の近くに、マットすなわち体育館が必要であること等である。まったく因果なクラブである。

合宿に入る前は、高校生が相手なら、というので比較的気が軽かったが、これがそもそもの誤まりで、あの高校生の強かったこと。(自分達が弱すぎたのか?)それはまだ良いとしても、あのコーチはまさしく鬼であった。いや、むしろ、あの恐しさは表現不可能というべきであろう。五体満足な者も日増しに減り、ついには失踪する者も出る始末。ただ1つ、我々に光を与えてくれたものがある。それは後半から食事を手伝いに来てくれたマネージャー(女性)の存在であった。(焼け石に水という声もあったが。)

しかし今考えるに、それが厳しいほど、無事終了時の征服感、充実感というものは強くなり、自分に自信がつくように思われる。これはやはりやり遂げない者にとっては絶対、わからない事であり、それゆえ非常に貴重な経験だと思う。しかしこの次の合宿を考える時、心が暗くなるのは、どういうわけだろうか。(関大体育会誌)

この夏の合宿の成果は、秋のリーグの戦果としてはまだ表われなかった(秋季二部4位)が、少数ではあるがそれらの部員のレスリングにとりくむ気構えがすこしずつ上向いていくのが、(秋迄に主将が片野に変わるということがあったが)、手にとるようにわかった。

この年が終る頃の部員の意識は次のように固まりつつあった。これは当時の部員の記したものである。

レスリングというスポーツは、まだまだ大衆に理解されていない面が多くある。

そこに我々の苦悩の諸原因があるのだが、学生間においてできえマスメディアによる曲解した固定概念が、根深く浸透している。

体育会全体の後退現象の最中であって、この風潮だけが、我レスリング部の部員減少に起因しているのではないということが、理解しえるであろう。

今後こういう要因に対して、いかに対処するかがクラブ再興のカギとなる。

それゆえ、レスリングというものが、いかに我々にとって身近であり、やりやすいスポーツであるかを述べなければならない。

レスリングというものは決して野蛮なものではなく、他の格闘技よりはるかに危険性が少なく、理論的且つ思案を要するものであることは、明らかである。

又、レスリングは体重によってクラスが分けられているので、その点においても万人向きである。その上身体における筋肉作用を、すべて必要とするので、成長過程にある我々にとってこれ以上のものはないであろう。

そして、自分の体をよく知り、それに合った技を研究し、身につけるという思考を繰り返すことによって、肉体的のみならず、精神的にも学ぶところが多くある。相手に勝てる技というものは決して、不特定要因による偶発的なものではないからである。

レスリングをやっている者にとって最も緊張する時というのは、やはりマットの上に対戦者と並んで立った時である。

特にこれがリーグ戦ともなると、この緊張度は想像を絶する。とにかく自分の味方は自分自身だけである。しかしいったん試合が始まると、不思議と消える。まさに無我の境地である。そして自分の得意技が、かかった時、又それ以上に相手をフォールしたときの醍醐味は何にも例えられないものである。(関大体育会誌)

この春、宮内他数名の1回生が入部したが、残ったのは宮内だけであった。夏休みあけの9月に岩本、奥井の2名が入部し、1回生は計3名である。

昭和49年

私が監督に就任して最大の難関を昨年切りぬけて、ひとつの目安がたった。この年の最大の目標は、部員の獲得である。関大体育会が発行した新入生むけのPRニュースで、「御入学おめでとうございます。関西大学体育会は傘下に45のクラブを有しており、全クラブ共、諸君と共に『より高い人間形成』を目指す為に只今新入部員を大募集致しております。」と募集キャンペーンを行なった。それには、「レスリング部」は次のように呼びかけている。

レスリングはその起源をたどって見ても又現代においても最も地味でゴマカシのきかないスポーツの1つです。だからこそ古代ギリシャ時代より人々は身心を鍛える場としてレスリングを愛して来たのです。こうした弛まぬ努力のみが開花する場で自分を見つけてゆく事は、我々学生にとって本当に大切なことではないでしょうか。

30年の歴史を有し、過去には世界的・日本の名選手を輩出せしめた我部も、現在は地味でゴマカシのきかないスポーツを敬遠するという近年の風潮を反映して、部員の激減を来し、その為西日本リーグの二部校に甘んじております。しかしこれが真の姿ではなく、この過渡期に、しっかりした土台作りを邁進しております。

我々は自信があります。なぜなら、未経験者が大学より始めても、まじめにコツコツ努力すれば必ず大成することを過去の事例に見て来ているからです。しかし君達の力が必要です。レスリングは48キロ級から100キロ以上級迄10階級のウエイト制です。体格の大小を問いません。体力作りに参加したい人も歓迎します。練習は第2体育室で行なっていますのでぜひ参加して下さい。学業と両立させ、自己を地道に鍛えたい人來たれ!

春のリーグ戦は、片野主将、飯田副将、岡田主務のもとに「少人数ながら抜群のチームワークで全力を尽くす」との抱負通り、二部の2位へと上昇したのである。

リーグ戦をおえる頃迄には、1回生も南口、大西（司人）、大西（浅人）、岡原と有望新人が集まっていた。そろそろ部員も自覚ができつつあったこの頃の事を次のように記してある。

今年のレスリング部の活動を顧みて、印象深い事であり、また一番残念であったことは、何と云っても春季リーグ戦での、対関学戦であろう。一部校近大がリーグ失格、二部優勝校が自動的に一部昇格となるチャンスがあった。我々にとって願ってもない条件であったと同様、宿敵関学にとっても最高の条件であった。そのような中で、リーグ戦初日に優勝争いの関々戦が始まった。この場をかりてリーグ戦の試合方法を述べさせてもらう。1チームは9名で、その内訳は52kg級1名、57kg級2名、62kg級2名、68kg級2名、74kg級1名、74kg以上級1名である。試合はどの級から始まるかは決まっていない。くじびきで試合前に順番を決める。宿敵関学は52kg級を先取し、57kg級の1人を勝ち得た。我々も、62kg級主将と、68kg級の馬力ある2回生が勝った。スコアは2対2。白熱した試合展開、応援も必死である。続いて、我々は74kg以上級が勝ち、3対2の逆転である。我々にとっての心配は、62kg級の2回生と57kg級の副将の2名が負傷をした事である。まことに無念であるが、62kg級を落とし、続いて期待の1回生を登場させたが、相手のベテラン選手には歯がたたず、2Rのフォール負けをした。スコアは4対3、もうあと2人しか残っていない。我々はどちらも負ける事はできない。次に我々はテクニックとスピードでは関大一番の副将をマットに送り込んだ。負傷にもめげず、1R、2Rとポイントはリードしている。もちろん正選手も補欠も、部員一同声をからしての応援である。が、どうした事か、3R相手の必殺技によってニアフォールから逆転負け。9人中5人を失って我々は負けてしまった。リーグ戦は対関学戦の1敗だけで2位に終わった。

残念であったし、くやしかった。しかし、試合で負けたこと、試合で悪かったところを反省し、それを将来にプラスしていくところが関大レスリング部の良さである。リーグ戦の痛手であった52kg級に柔道の経験者である素質十分な新人2名が登録された。彼らの入部により1回生も5名になった。また彼らの入部により軽量級のスーパーリング強化にもなった。（関大体育会誌）

部員が10名程になったこの夏は、桃山学院大学ならびに広島修道大学と合同合宿を広島で行なった。この頃には、「新しく出発する」といった堅苦しきはなく、むしろ一步一步つみあげる明るさがみなぎりだしていた。

……そして新入部員の増えたところで、夏期合宿にはいった。今年是一部校との合宿、基礎トレーニングが朝2時間半、スパリングが昼から4時間という激しい内容である。この苦しい1週間を、我々は頑張り抜いたのだ。中でも、スポーツ経験のない者を含む1回生が一番元気に頑張り通した事は、賞讃に値する。合宿中に1回生は「単に強くなるのではなく、試合の時にマットの上の相手に恐がられる選手になりたい。」と語ってくれた。そして最近では、“WHAT IS THE WRESTLING?” から “THIS IS THE WRESTLING.” になってきた。これらの活動を通じて、有望な新人を獲得でき、充実した練習ができる様になった事は、一部復帰を目指しての戦艦「関大レスリング丸」の出航である。(関大体育会誌)

夏が終って、片野が来年度イギリスへ留学するという事で主将を辞退した。かわって飯田が主将、副将に宮内がそれぞれ後を引きうけることになった。

秋季リーグ戦は、この春のリーグ戦のメンバー交換に出席しなかった近畿大学が自動的に二部転落したため、二部リーグに出場した。当時、近大は一部において優勝を狙えるメンバーをそろえていたので断然強く全勝で優勝した。また、春二部リーグの名城大学も共に同メンバー交換に出席せず自動的に出場停止となっていたが、最強メンバーをそろえていただけに、秋のリーグ戦ではやはり強かった。これらに後塵を拝して関西大学は3位に終わったのである。しかし、昨年来、最も手ごたえのあったリーグ戦で、この頃より二部優勝を密かに狙いだしたのである。

昭和50年

やっと陣容も落ち着いて、主将飯田、副将宮内、主務岡田と去年の後半よりもちこしで、この年は幕を開けた。この春、片野がぬけて軽量級に穴があいたが、「若手のチームであるが、2回生ががんばれば優勝も可能なチームである。」の評判通り、中・重量級が活躍して全勝して二部初優勝を飾った。入替戦には惜しくも中京大学に6対3で敗れたが、「力」のついてきたことが自信に結びついてきた。同時に反省点を部員が自覚するようにさえ成長した。

本年度の我部の活動を顧みると、色々と嬉しい事もあるし、また、多くの反省点も見つけられる。まず、嬉しい事は何といっても部員の充実である。ここ数年、我部は部員不足に悩まされ、ひいては戦力不足として、リーグ戦等において、苦しい戦いを強いられてきた。しかし、本年度は久しぶりに部員数が10名を越え、全学年共、欠ける事なく部員が存在するという、大変嬉しい年になった。やはり、部員数が増すと、自然と練習にも力が入り、活気のあるトレーニングやスパリングが、行えるようになった事は、この上ない喜びである。かつては、西日本学生レスリングの王者として、華々しくその名を轟かせた我部も、3年前、突如として二部落ちという悲しい現実にはグチ当り、以後、低迷を続けていた。過去の戦歴が輝かしいだけに、このまま我部を衰退させてしまう事が残念でならないと思ったのは、私だけではあるまい。我部の大先輩であり、且つ現在、監督をなさっておられる伴先生が、そうである様に、部員全員が、何とかしなければと思っていたに違いない。そして、そういう信念が突っか、二部落ち以来、ちょうど3年目の春のリーグ戦には、かつてない部員数で戦いに望む事が出来たのである。しかしながら、実はそのリーグ戦も、せっかく下級生部員が充実しながら、肝心の4回生が、手首骨折で出場不可能になったり、あるいは、学連関係の仕事で練習不足となったりして、戦力としては決して最高の状態ではなかったのである。ところが、やはり部員の充実とは、すばらしいもので、いざ戦いが始まってみると、我部は白星街道をつつ走り、リーグ戦終了時には、優勝という二文字が、我部の上に輝いていたのである。我部の低迷時において、まず当面の目標であった「二部優勝」という事が、これほど早く、しかも私の在学中に果たせるとは、正直言って、予想していなかった。それだけに、感激もひとしおである。しかも、私が嬉しかったのは、そういう下級生部員には、

高校時代レスリング経験者が、1人もいないという事である。彼等はみんな、大学に入ってから始めた者ばかりである。その彼等が努力して、勝ち取った米冠であるだけに、私は意義深いものであると思うのである。しかし、我部には大きな反省点も存在する事も忘れてはならない。まず、この程度の事で満足してはいけないのである。この「二部初優勝」という事が、少なからず部員の気をゆるませた事を、認めざるを得ない。その結果が、やはり、その後の練習の雰囲気にも表われ、ひいては、合宿も当初の予定通り運ばないという事態を招いてしまったのである。これは大いに反省しなければならぬ点である。「二部優勝」は、あくまでも我々の目標のワンステップにすぎない。西日本の王者に返り咲く為に通る最初の駅にすぎないのである。目的の終着駅は、まだまだ先である。ここで気をゆるめて機関車をストップさせたのでは、今までに通過した駅は全く無意味となるだろう。新関大号は今、大きな汽笛と共に走り始めたばかりである。そして、必ず終着駅まで、息切れする事なく走り抜いてくれる事と私は信じる。数年ぶりに、関西の新人チャンピオンを誕生させ、学生選手権において、メダリストを出した、我レスリング部であるのだから……。尽き果てることなく、不死鳥の様に再び、華々しく舞い上がるはずである。(関大体育会誌)

秋には、再び二部優勝を6戦全勝で成し、入替戦においても中京大学を1点差で降し、昭和47年以來念願の一部復帰を果すことができた。しかし、私の胸中では、この入替戦でむしろ「敗れて」、二部でもう数シーズン実力を蓄える方が将来的に一部での安定性を確保できると予見していたのである。この胸中は、押立理事長にも密かに明かしていた。だが、実力では数段まさる中京大学が負傷者を続出させて、勝利の女神は我方に味方していた。

この春、新人には片岡、西川、宮田等の重量級が入部し順調に実力をつけていった。この年より個人戦においても活躍するようになり、西日本学生選手権大会には久方ぶりにグレコの68キロ級で岩本が3位に入賞した。また西日本学生新人選手権大会では、フリーの48キロ級で大西司人がこれまた久々に新人王に輝いた。

昭和51年

3月、西日本学生レスリング連盟は連盟行事として対カナダとの交流を始めた。この年関大の宮内(74キロ級)と宮田(82キロ級)の2選手がこの遠征代表に参加した。これも久方振りの海外遠征代表選手の出現である。部員に励みと目標を身近かに感じさせる良い刺激となった。

この春のリーグ戦より階級制が48キロ1名、52キロ1名、57キロ1名、62キロ2名、68キロ1名、74キロ1名、82キロ1名、+82キロ1名の9階級に変更することとなった。

この春は、宮内主将、奥井副将、岩本主務のもとに一部で実力をためすことと、「チームワークを武器に一部上位を目指す」ことを目標にリーグ戦に臨んだ。結果は、福岡大⑦-2 関大、大体大⑧-1 関大、近大⑦-2 関大、同大⑨-0 関大、桃山大⑥-3 関大と全敗で最下位となったが、少数の選手は一部においても既に実力が接近していることが解った。続く入替戦においては残念ながら、関学に1点差に敗れてまたもや二部へ逆もどりということになった。中量級に選手を欠いていたのが命とりであった。

だが、こうして本当の一部の力を身につけて行くことができると、ある意味でそう落胆せずいられた。

秋再び二部で6戦全勝の優勝、入替戦は桃山学院大学に6対3で敗れはしたが地力はついてきた。この壁をのりこえてこそリーグ戦での安定性が少しづつ培われるのである。

入替戦に敗れたとは云え、当日応援に来てくださったOB諸氏が、二部優勝の祝賀会を催してくれ

た。ここに関西大学レスリングのよき伝統とOB諸氏の暖かい援助を感じ、部員は決意を新たにしたのである。

この年、国体でグレコの48キロ級に大西司人が第3位に入賞した。これは、「コツコツやれば、必ず開花する！」との自信を部員達にもたらした。また、当の本人がより自信を深めたことであろう。これこそかつての関大の底力であったのである。西日本学生新人選手権大会には、グレコで74キロ級の西川が新人王に、また82キロ級のフリーでは宮田が新人王になるなど着々と成果が表われてきている。

〔 3 〕 終 章

昭和50年の秋季リーグ戦第2日目、村山コーチが体の不調を押して応援にきてくれた。この時既に二部リーグの優勝の目途はついていて、体調が悪いということでしばらく顔を見せなかった彼をまじえて、その日の試合が終って堀江前監督、光富元コーチ、藤田コーチ、藤浦コーチ、それに私と5名で会食をした。

話は、どん底からのもりあがりをお互いに祝うことにつきた。この時、彼は排尿に障害があるので水分はあまりとらないのだと云っていたが、関大レスリング部がどうにか見られる形になったことを祝して乾杯をしようと云うことで、1杯だけ皆と祝したのである。翌日、関大が二部で優勝し、その祝賀会を有志のOBで開いたが、それにも彼は体の不調で出席できなかった。

それから数日して、彼は半年程の長い闘病生活に入ったのである。その間のご両親のなみなみならぬ看護も空しく、昭和51年5月6日午後3時過ぎに彼は永眠した。若冠33才であった。寝棺には「レスリングの本」が入れられた。

どん底からの出発に際して、彼の私に対する励ましの言葉が大きな支えであっただけに、大変なショックであった。彼の我部に対する貢献の大なるを記してご冥福をお祈りする。

さて、私が監督になったころから高度成長期の一種独特の「うかれた風潮」は、「石油ショック」を経て少しは醒めつつあったが、まだ青年の心は不安定であった。その頃の学生気質を次のように描写したことがある。

現代の学生を見ていると、「あれもしたい、これもしたい」という対象が多すぎて、一見羨ましく思うこともある。しかし、実を云えば、賢明に選択しきれずにいる彼等を見て同情している次第である。何か目新しいことをするために、現在行っていることを簡単にやめてしまう八方美人が大勢いる。当世風というのか、それもあまりにも諦めがよいのに戸惑ってしまう。聞けば、それ相当の理由もちゃんと用意している。そういう学生をよく観察していると、充分な計画と決意(?)をしていた筈なのに、またもや簡単に訣別するのである。

こうした学生がレスリング部の門をたたき、幾人かが去って行った。残った学生は一見平凡には見えたが、彼等が卒業する時は「自分」をもって社会に出て行った。

最近やっと世の中が落ち着いてきたようだ。学生は何か「しっかりしたもの」を身につけたいと願っている。そうした空気がレスリング部の部員を見ていると伝わってくる。やっと我部も「自発性」ができてきた。これより再び不死鳥の飛翔が「真理の討究、学の実化」を求めて続くであろう。

最後に先輩諸氏からうけた数ある薫陶の一端をのべて「関大レスリング部」の発展の糧としたい。私が1回生の時、故安川先輩が練習にこられた。新人を集めて「心の持ち方」について、ご本人の

経験談を話してくれた。「昭和25年の春のリーグ戦、鎖骨骨折をおして試合に出場し、関大を優勝に導いた。気力があればできる。」後に、東京五輪で市口先輩は、足首の捻挫を克服して優勝した。メキシコ五輪ではフリーのバンタム級で上武選手が肩の脱臼にもめげず優勝をものにした。私自身について言えば右膝の内側靭帯と十字靭帯の一部を、昭和37年の国体の練習時に切断した。競技生活において致命傷であったが、「気力があればできる」ことに勇を鼓舞されてどうにか今日までレスリングに携わることができた。

「コップ1杯の水の味」を説いたのは西脇先輩であった。当時、彼は我々のコーチで、「コップ1杯の水の味はいろいろに変る。普段の水、試合に勝って喉を癒やす水、減量中の水……。それぞれの価値がある。たかがコップ1杯の水に。」とレスリングを通して真理を探究する努力の貴重さを教えてくれた。「内なる探究」、ここにはビートにのっておどりだすような変化と手軽なおもしろ味はないが、学生の求めるべき姿がある。

2回生の時はローマ五輪の年であった。最終予選に市口先輩が出場して優勝し代表となった。予選は5日間にわたる試合であったことと、代表を目指す緊張が普段は減量に苦しむ彼に、逆に57キロを容易に維持ささしめていた。私は彼の応援と世話をかねてただ1人随行していた。ある日、疲れを癒やそうということで「甘いもの」をとることにした。それはかなり厚手のゴム風船玉に入ったゴルフ玉ぐらいの水ようかんであった。これを2人でいくつかたいらげたのである。ひとつ、ふたつと食べるうちに、彼はテーブルの上の「爪楊枝」でゴム風船玉をつついて簡単に中身を取りだす方法を発見した。それまでは2人してゴム風船の口のところを堅く結んだゴム紐を丁寧ほどこいて、中身を取りだし食べていたのである。この何んの変哲もない発見に類する彼の研究熱心さと着眼点のすばらしさが、後に彼をオリンピックのゴールドメダリストにしたのだと、いまもって思っている。身近かなところに、いくらでも真剣にとりくむべき材料はころがっている。チョットの違いが大きな結果を生む、これを彼は教えてくれた。

指導者の立場に立ってその責任の大きさを教えてくれたのが押立先輩である。彼が西日本学生レスリング連盟の理事長になって以来のご指導には、どれひとつとってみても敬服せざるにられない。そこにはレスリングを愛する真摯な姿と、指導者としての責任の重大さをいかに果すかということなど、その手本を見せてくれている。

コツコツと地味ではあるが、「誠実」が指導者にとって貴重であると教えてくれたのは佐々木先輩である。指導者はまわりの雑音にふりまわされるようではいけない。確固たる展望のもとに一歩一歩すすむべきである。これを身をもって教えてくれた。彼は、昭和52年大阪体育協会よりその指導者たるを、功労賞を贈られて表彰された。

まだまだ多くの薫陶をうけている。こうした経験が「青年」を大きく育てていくのである。大学スポーツはこうあるべきであると昨今とみにそう思う。インフォーマルな教育の場、しかもスポーツを通じて、これは日本の学生スポーツの一大特色なのである。こうした場をレスリングを通じて醸成したい。

先輩諸氏におかれましては今後とも後輩の人生の教師たらんことをお願い申し上げます。関大で給与をいただいている立場からいうと、そうした「伝統」が関西大学を育てはぐくむ大きな要素をしめしているのではないかと一人納得している次第である。

これから関西大学レスリング部の門をたたく後輩諸君！君達の身近かに、「マット」の上に、諸君の「青春の道場」がある。そこに「つかむべきもの」がある……。

末筆ながら関大レスリングに携わってこられた歴代部長ならびに監督・コーチの諸先輩、また関係者の皆様に最大の敬意と感謝の意を表します。また、この「分担」の執筆を、故人になられた関係者諸氏に捧げてご冥福をお祈り致します。併せて部の発展に未熟ながら尽くすことを申しそえて終章の結びとします。

関西大学レスリング部監督

西日本学生レスリング連盟副理事長

全日本学生レスリング連盟常任理事

(財)日本アマチュアレスリング協会理事

F.I.L.A 国際特級審判員